



コウノトリのお米

金丸弘美

今、もつとも関心があるのが兵庫県豊岡市の「コウノトリのお米」である。とはいってもコシヒカリ。日本では米は四百種類以上栽培されている。圧倒的に多いのはコシヒカリで、約四十パーセントを占めている。しかも新しく品種改良されて登場している米は、ほとんどがコシヒカリ系統だから、豊岡市の米は特別珍しいわけでもない。

なぜ特別に興味をもっているかというところ、豊岡市の米は市全体の十五パーセントが、完全無農薬・無化学肥料か特別栽培なのである。そして環境に配慮した田んぼにはカエルやドジョウやタニシなど生き物がたくさんいる。そんな米作りに注目しているのだ。

豊岡市は兵庫県の北部にある日本海に面した八万九千人の町で観光にも恵まれたところだ。一方で低湿地帯としても知られ、田んぼや湿地を餌場としているのがコウノトリである。彼らは動物性たんぱく質を食する鳥なので、カエル、ドジョウ、フナ、ヘビを始め、昆虫などを食べる。大学生たちが観察したビデオを見たら亀までも食べていた。コウノトリが野生復帰したのは二〇〇五年、実に三十四年ぶりのことだった。

鳥がなぜ野生からいなくなったのか。それは明治期の鉄砲による乱獲、第二次世界大戦には巢となる松の木が、根から飛行機の燃料に使う油を採

るために伐採され住処を追われた。戦後は農地を拡大するため鳥の餌場であった多くの湿地が田畑に変わり、大量の農薬が使われコウノトリは激減したのである。環境破壊がもたらした結果だった。

一九五六年にはコウノトリは二十羽となり特別天然記念物に指定された。一九六五年コウノトリ飼育場（現コウノトリ保護増殖センター）が完成。野生のコウノトリ二羽が捕獲され人工飼育が始まった。だがその甲斐もなく、一九七一年、日本の野生のコウノトリの最後の一羽が豊岡で死んだ。そして一九八五年、旧ソ連ハバロフスク地方から幼鳥六羽を贈呈され、豊岡市の職員が大切に育て、一九八九年に待望の雛が誕生。その後、毎年誕生するようになった。そして二〇〇五年に放鳥されたのである。

放鳥にあたっては、餌場となる田んぼの環境作りをしなければならぬ。役場の人たちを中心に、一九九九年、兵庫県が建てた「県立コウノトリの郷公園」を拠点に実践へと移されてきたのである。



田んぼのコウノトリ

公園のそばの祥雲寺地区の農家を中心に有機農業が行われている。この田んぼは、冬場に水が張ってある「冬期湛水田ふゆかみずたん」。

日本国内の田んぼは秋になると稲の刈り取りのために水をすべて抜いてしまう。コンバインを入れるためである。田んぼの下にはパイプが埋め込んであり、一気に水が抜けるようになっていく。すると乾田となつて、ドジョウやタニシが越冬できず、トキやサギなどの餌がなくなってしまうのである。

市と農家と協議をして田んぼの生き物を戻す農法に取り組んだ。全国から有機農業の実践者が招聘され勉強会が行われた。

冬に水を張る試みは、すでに宮城県みやぎけんの田尻で行われ実績をあげている。その関係者を中心に各地から呼ばれた。そして農家がノウハウを獲得し、実行に移せるように県と市とで五年間にわたり学習会のための補助金を出したのである。ヨーロッパでは、環境直接支払いという環境を守るための補助金があるが、おそらく日本で、本格的に実施したのは、豊岡市が初めてのことだろう。

農家の中心となり地域で会合を開き、地区全体をまとめる役割をしたのは暖悦喜さんなつえきさん。



冬季湛水水田前の暖悦喜さん(左)と役場の宮垣均さん(右)

「農業を使わないのは、孫のため、自分たちのため、そんな思いでやりました」と言う。意外な話を聞いた。暖悦喜さんが小さいころは、田んぼに降りて苗を踏むので、害鳥だということで、石を投げて追い払っていたという。そんな農家を説得するために、市では、二〇〇五年、シベリアから偶然、一羽の野生のコウノトリが舞い降りたのを機会に、本当に苗を踏むのか一日中観察をしたという。その結果、鳥が稲を踏むのは約四百歩で一株の確率。かりに欠株になつてもほかの稲が自然に補い、収量には影響がないことも確認された。こうして農家と市とJAが連携しての、コウノトリを戻す田んぼの実践が始まった。

稲の栽培には「栽培暦」といって、マニュアルがある。普通は、いつどの時期に農薬や化学肥料を使うかが指示されている。ところが豊岡市の栽培暦を見たら驚いた。

種粉消毒は六十五度のお湯で二十分とか、六月の中干しは七月に行うということが書いてあり、カエルやドジョウなどの生き物の絵がたくさん描かれている。中干しとは、田んぼの水をいったん抜いて、稲の株に酸素を送り込み成長を促すのである。でも六月はオタマジャクシがカエルになる時期。水がないと死んでしまう。カエルは害虫を食べてくれ、コウノトリの餌にもなる。それでカエルになる七月まで待つとあったのだから、びっくりである。

そんなわけで豊岡市の米が気になつているのである。

かなまる・ひろみ 一九五二年、佐賀県唐津市生まれ。食環境ジャーナリスト・食総合プロデューサー。総務省地域力創造アドバイザー。著書に「給食で育つ賢い子ども」「子どもに伝えたい本物の食」「本物を伝える日本のストーリー」「創造的な食育ワークショップ」など。日本ペンクラブ環境委員。